

## 『エンディミオン』の主題と構成 ——不滅性への探求

熊谷園子

### 序

夜空に煌々と冴えわたる月ほど心を打つものはない。光と闇のコントラストが織りなすこの天空の「美」を、人々は生命の源なる太陽に劣らず、愛してきた。輝やくものはみな人を引きつけるが、その中でも闇を貫く月光は、世界の美の存在と神秘を人々に身近に直覚させるものである。科学的にいえば、月の人間に対する影響力は太陽には及ぶべくもないが、情緒的な面では太陽をしのぐかもしれない。太陽の不動の姿にたいして満ちたり欠けたりする月は、成長してのち老いていく人間の生の推移に似ているようであり、また欠けて沈んだのち新月として再び生まれるその回帰のリズムは生の不滅の相を表わしているようで、我々に親しみと感銘を与える。また、太陽がすべてを明るく照らすのに対して、月は闇に浮かぶ光であり、闇と共存するものである。人間を含めこの世の生の様相は、明快に合理的にとらえられる面ばかりでなく、複雑微妙な面も多い。そしてその複雑微妙なほの暗い部分のほうが人間を知るうえで大きな役割をはたしていると考えられるので、その点で人間の生は月的といえるのである。生の明滅と永遠回帰の相を同時に表わし、また生の未知や神秘の相に光を投げかける月の妙なる銀面が大いなる比喩形象として、古来多くの詩の舞台に呼び出されてきたのもうなずける所以である。そのなかでもキーツの『エンディミオン』ほど雄大なスケールで月を讃えたものはない。

『エンディミオン』<sup>1)</sup>は「月」をテーマにした物語詩である。このなかでキーツはロマン主義の詩人として神話を作成している。ロマン主義では従来のキリスト教神話による世界像を離れて、独自の世界像を描くことが詩の中心的な関心となった。それは異教の神話から暗示を受けたものや、自然の神的な力に協応したものなど形は様々であるが、内容のほとんどは想像力を駆使して書かれる。そこでロマン主義では想像力の働きそれ自体に特別な意味を見出すようになった。想像力は空想とははっきりと区別され、一種の先見的能力と見なされるようになり、その先見的能力によって書かれた詩は事物の内面機構を見きわめ、現実世界の矛盾を指摘し、世界の来たるべき未来像を描くものとなった。その像は模倣ではなく想像力による新しい構築になるので、神の創造行為と似たものと見なされ、詩における神話作成が新しい世界創造と

なった。想像＝創造である。キーツ自身、『エンディミオン』について書簡の中で次のように語っている。「この作品が僕の想像力と、特に僕の発明の能力—これは本当に稀なものだが—の試金石、試練になるだろう……」<sup>2)</sup>つまり『エンディミオン』はこの世界を月的な相として描く象徴的な神話詩である。それはこの世界に、月の推移しながら回帰するという恒常性とその不滅の光輝を見出すということであり、キリスト教神話の終末思想に対抗する一つの新しい世界像の確立と考えることが出来るものである。また、このような作品において、主人公は、世界創造を行なう作者の道具、または代理の役を果たす。つまり主人公は作者の分身で、その行動は作者の意志の投影である場合が多い。『エンディミオン』の主人公エンディミオンもその例にもれない。彼は十全たる人間であるとともに、作者の意志のアレゴリカルな象徴でもある。

『エンディミオン』は千行ずつの四巻で構成されているが、プロットと思われるものは非常に単純で、どの巻も詩は中心となる単一のテーマ、「月」の表わす世界の諸相を多種多様なイメージと神話的シンボルを積み重ねて綴られている。そこでこの詩は、その冗漫さのために、全体の構成を探る研究は少ないのである。この詩はイメージやシンボルが実にふんだんで、華麗なので、全体の構造がほとんどイメージの中に埋没しているように見え、それがこの作品の特徴となっている。キーツはそのことを意識的に行った形跡がある。「詩の愛好者というものは、ぶらぶら歩き回って気候に選んだり、拾い上げたりできるような、非常にたくさんのイメージがあって多くは忘れられてしまうが二度目に読み返すと新しいものが発見できるような、そしてそれが夏に一週間くらいあてもなく歩き回るときの心の糧となってくれるような、そうしたちょっとした場所をもつことを好むであろう。」<sup>3)</sup>と語っているからである。詩はその表現によくイメージを使うが、それはイメージが論理よりも読者の感覚に直接訴えることができるので、事象をより具体的に伝達するのに役立つことと、また同時に論理では伝えられない内容を表現することが出来るからである。『エンディミオン』は新しい世界像を描いたものであるから、その、今まで知られたことのない内容を伝えるためには、イメージを使うのが最適であり、又イメージに満ちあふれているという特徴自体が、この詩の主題を語っていることにもなる。この小論は、詩のイメージやシンボルを全体の構造の中でとらえ、作品の統一的構想を明確にすることを主眼としたものである。

## 1. 「月」と世界像

物語はギリシャ神話から取材したもので、もとの神話は、月の女神がラトモス山の牧羊者エ

ンディミオンに恋し、彼女は人間である恋人がいつかは死ななければならないという運命に耐え切れず、彼を老いてしまうことがないよう永遠に眠らせてしまうが、今度は老いることがないかわりにいつまでも目を覚ましてくれない恋人に女神は嘆息ばかりをもらすというもので、それ以上のことはほとんど知られていない。これは物語としてはわずかなものだがキーツにとっては壮大な詩的飛翔に駆り立てるテーマであった。そこにはまず人間を愛した女神の悲恋が意味する *mortality* と *immortality* の矛盾の関係が中心にあり、「月」があり、「眠り」があり、キーツの詩に必要な材料はみな揃っていたのである。

キーツの『エンディミオン』の方は、月の女神に愛され、眠ったエンディミオンの側から書かれ、人間でありながら不滅の女神を恋する故の、熾烈な愛の経験の物語となっている。

若き牧羊者エンディミオンは、ラトモス山麓の原野でパン神を奉って敬けんに暮す人々のなかでプリンスのような存在であった。彼はいつも清らかな光を投げかける月の女神を心から愛し、賛美してきたが、あるとき夢のなかで黄金の髪をなびかせて天から降りてきた世にも美しい女神に愛され、幻惑される。目を覚ましても少しも色あせない憧れに、彼はやつれ青ざめてひとり野辺をさすらった。やがて不思議な力に導かれるままに地下の世界と海底の世界を旅し、地下の世界では季節ごとのヴィナスによるアドーニスの蘇生の光景や川神アルフェウスとニンフ、アリシューザの悲恋の悲劇的な場面に出会い、また海底の世界では魔女サーシに千年、海底に閉じ込められた半神グローカスとの運命的な出会いを経験する。地上に戻ったエンディミオンは不幸なインドの乙女に出会い、同情から彼女に心を引かれてしまうので、エンディミオンは自分の二心を責めて苦悩する。彼はマーキュリーが地中から出現させた二頭の天馬に乗ってインドの乙女と天上界を駆けるが、途中、夢うつつの中で黄金の髪の恋人が月の女神だったことを知り、いかにも悲しげに去っていく月姫の姿に彼の心はかき乱される。やがて地上に引き戻されたエンディミオンは月の女神を祭る森でインドの乙女と最後の別れをするが、すると彼女の顔が突然輝き初めて月姫の姿に変わり、彼はいままでのすべての苦しみがあがなわれて、妹のピオナが見守るなかを女神とともに天上界に消え去って行ったのである。

以上が粗筋で、夢のなかで女神に会ってから地下の世界に入るまでの地上編が第一巻で、地下の世界を扱ったのが第二巻、海底の世界を扱ったのが第三巻、そして第四巻は天上界を扱い、女神と結ばれるハッピーエンディングをもって締め括っている。

キーツは『エンディミオン』に先立つ小品 *I stood upon a little hill* の中で、エンディミオンと結ばれることのない女神の運命をあわれに思い、自分の詩のなかで二人を結婚させるのだと云っている。『エンディミオン』の新しい神話は、エンディミオンと女神の結婚である。しかしどのような物語にしろ勝手に筋だけを書き換えるわけにはいかないのは当然のことである。

もとのギリシャ神話では恋人を若いまま眠らせてしまったかわりに愛を交わしあうことができなくなった。矛盾である。そこには *mortals* と *Immortals* が結ばれようとする必然的に生じるねじれの現実が描かれていて、昔の神話のなかにはこの世の現実を語る真実の訴えがある。一方、キーツは女神との結婚を描いたときにこの世のどのような真実を訴えたのであろうか。この結婚は *mortality* と *immortality* の結合を意味することになるのであるが、通常ではありえないことである。キーツの意図は美的レベルに於いて、*mortality* の中に *immortal* の相を見ること、つまり詩人として世界に不滅の相を描き出すことであった。それがキーツにとっての想像であり、創造なのである。それは明滅しながら同時に永遠回歸する「月」の姿が象徴する世界である。その世界が描き出せたとき、女神と人間が結ばれているのであり、また逆に女神と人間の結婚が無理なく成就させられる文脈が見い出せたとき、その新しい世界が姿を現わしていることになるのである。そのためにキーツは「愛」と「生の悲哀」という人間存在特有の要素を掘り下げて行き、その根元に美の輝やきを見ようとする。そこで物語は「美」と「愛」と「悲哀」というテーマを巡って展開することになる。また物語に登上する三人の女性又は女神はそれぞれこの三つの要素を具現したものと考えられるので、この作品はアレゴリカルな側面を持つことになる。

物語の中で、「月」は、月の女神にあこがれるエンディミオンの夢の中に、名の知れない完璧な美しさをたたえた女神として現われ、次に不幸なインドの乙女の姿で現われる。まず、月光の具現である月の女神は「美」を、夢の中の美しい女神は「愛」をそしてインドの乙女は「人間の悲哀」をそれぞれ示していると考えて見るとこの作品はわかりやすいと思われる。エンディミオンは月の女神と夢の恋人とインドの乙女が同一であることを知らなかったので心はいつも三つのあこがれに満たされていた。彼は自分の二心、三心に悩むが、これはこの三つの要素をそれぞれ「月」に結びつけることがエンディミオンの匿名の仕事であったから当然のことなのであった。大体の批評家は『エンディミオン』のテーマを詩人の「美」へのあこがれか、人間の官能的情熱かのどちらかに考えようとするが、詩は読めば読むほどそのどれか一つに軍配を挙げるわけにはいなくなる。その上更に、人間の悲哀も大きなテーマとして登場してくるので、混乱するばかりとなる。そこで、詩のメインテーマを「月」に置き、三つの要素をサブテーマとして月のヤヌスの相としてみるとこの詩の構想が見えて来るように思われる。この詩は「美」も追求しているが、官能的情熱も表現しているし、また人間の生の基調としての悲哀も歌っているのである。そしてそれらがみな「月」であったことの意味は、月の女神が輝やくのは当然の事であるが、それぞれが月の光輝を持ち、そのために *mortal* でありながら、*immortal* であるという月的な神秘の相を持つということである。そしてキーツはこの三つの

のを生の根源的な要素と見ているので、この世の「生」全体が「月」で象徴されるものとなる。ただ、わかりづらいのが「悲哀」であろう。悲哀感とは *mortality* の意識に他ならないからである。しかしこれがキーツの最大の独創ともいえるもので、この「悲哀」を軸に「愛」と「美」がこの世に展開されるとする重要なものである。以下これらのことを詩のなかで具体的に見ていきたい。

## 2. 「月」と「愛」

『エンディミオン』は有名な「美の賛歌」から始まる。

A thing of beauty is a joy for ever:  
Its loveliness increases; it will never  
Pass into nothingness, but still will keep  
A bower quiet for us, and a sleep  
Full of sweet dreams, and health, and quiet breathing.  
Therefore, on every morrow, are we wreathing  
A flowery band to bind us to the earth,  
Spite of despondence, of the inhuman dearth  
Of noble natures, of the gloomy days,  
Of all the unhealthy and o'er-darkened ways  
Made for our searching—yes, in spite of all,  
Some shape of beauty moves away the pall  
From our dark spirits.

(1. 1-13)

「美しきものは永遠の歓びなり」で始まり、この世界がどんな苦渋に満ちたものであろうとも、「美しきものの姿は我々の暗き心から棺の覆いを取り除いてくれる」という冒頭の一説は、「棺」の意味する我々の *mortality* と、それを取り除くものとしての「美」を描いて、この詩の内容を象徴している。続く美の賛歌のなかで、最も美しいものの一つとして「月」がクローズアップされる。

熊谷園子

...so does the moon,  
The passion poesy, glories infinite,  
Haunt us till they become a cheering light  
Unto our souls, and bound to us so fast  
That, whether there be shine or gloom o'ercast,  
They always must be with us, or we die.

(1. 29-33)

ここでは「月」は「情熱の詩」、「永遠の輝き」と呼ばれ、その光は人間の魂を励ます光となって常に我々と共にあり、さもなくば我々は死んでしまうと歌われて、「月」なる美が *immortality* を意味することが明示されている。

この作品の霊妙な世界に入るために、キーツが物語の出発点にするのは現実社会と天上界の中間に位置すると思われるアルカディアある。そこは美的なレベルでものをみるとき自ずと開かれてくる場である。キーツはこの場所をギリシャ神話とおなじラトモス山のふもとにおき、パン神を信奉しながら牧歌的生活を営む無垢な住民の里として描いている。そしてここで羊を牧す羊飼いたちとは詩人たちのことである。というのはその仕事が、「夜毎に宵の明星を呼び出すこと」などのこの世の美を描き出すことであり、また「月あかりで美しい詩を熟読する乙女の蒼い頬を花の色で染めること」などとはっきりそれを示す表現もあるからである。

And what our duties there: to nightly call  
Vesper, the beauty-crest of summer weather;  
To summon all the downiest clouds together  
For the sun's purple couch; to emulate  
In ministering the potent rule of fate  
With speed of fire-tailed exhalations;  
To tint her pallid cheek with bloom, who cons  
Sweet poesy by moonlight—besides these,  
A world of other unguessed offices.

(1. 362-370)

このアルカディアでもっとも天上に近いのが牧羊者のプリンスと呼ばれるエンディミオンで、

その反対にもっとも現実的な価値判断をもっているのが妹のピオナである。ピオナはその点で、詩的な考えにあまり馴染みのない一般の我々読者の考えを代弁していると考えられる。そこでピオナとエンディミオンの会話のやり取りは、我々に対する作者キーツの内容の説明でもありうる。また、ピオナを通して我々は彼らのアルカディアの片隅に参入し、初めから作品の特殊なレベルで詩に臨むことが可能になる。

アルカディアの住民が信奉するパン神とは、本来、森の自然の神で、大地の豊穡と牧羊の保護者である。パンとは汎、あまねくを意味し、ここでは特に天と地を行き交う普遍的知識を有するものとしての面が強調される。

パン神は「神秘の扉を開く畏るべきもの」という呼び名から、更に積極的な役割が暗示され、つぎの“leaven”「酵母」という言葉で、自然と人間の創造的能力、情熱を表わしていると思われる。

Dread opener of the mysterious doors

Leading to universal knowledge—

．．．

Be still the unimaginable lodge

For solitary thinkings—such as dodge

Conception to the very bourne of heaven,

Then leave the naked brain; be still the leaven,

That spreading in this dull and clodded earth

Gives it a touch ethereal, a new birth;

Be still a symbol of immensity,

A firmament reflected in a sea,

An element filling the space between,

An unknown—but no more!

(1. 288-303)

パン神の能力のうち豊穡の約束は自然界の生殖の豊かな営みに関係している。また牧羊の保護の方は詩の創作力に関係している。一見して関係のなさそうなこの二つのものがパン神の中でひとつに結ばれている。生殖の原動力になるものは愛であり、そこで生れるものは新鮮な生命であり、新生の美である。また詩作もその原動力になるものは情熱で、そこに生み出される

ものは「美」である。パン神の創造精神は、自然界にも、人間の詩作のような創造行為にも力を及ぼすものとして描かれている。パン神のこのような能力はこの世界の「愛と美」の恒常性にかかわるものとして、一章で見てきたような「月」の役割と同じである。ただ、月の光が上からのものであるのにたいして、パン神の力は下からのもので、自然や人間の内部にあるものである。人間が天にあこがれるのも自身の中に上昇しようという魂を有しているからにはほかならない。エンディミオンが月の女神の訪問を受けることができたのも、詩人として時の熟したとき彼の前にパン神の「天の扉」が開かれたからであった。自然や人間の内部にある創造性、不滅性は常に神秘であるため、パン神に見立てられ、美的に言えば月の光の訪問に例えられるのである。以上の事を具体的に示すため、作者はエンディミオンに夢の中で女神との「愛」を経験させ、彼に愛と幸福についての哲学を述べさせている。

エンディミオンの夢は、いぶかる妹ピオナに語られる形で我々に示される。

Yet she had,

Indeed, locks bright enough to make me mad;  
And they were simply gordianed up and braided,  
Leaving, in naked comeliness, unshaded,  
Her pearl-round ears, white neck, and orbèd brow;  
The which were blended in, I know not how,  
With such a paradise of lips and eyes,  
Blush-tinted cheeks, half smiles, and faintest sighs,  
That, when I think thereon, my spirit clings  
And plays about its fancy, till the stings  
Of human neighbourhood envenom all.

(1. 613-622)

「狂いたくなるような黄金の髪」とか、「彼女を思うだけで、人間のそばにいることが悉く辛い」というような病的な感情表現をきいたピオナは、兄がただ恋にうつつを抜かしているにすぎないと思い、呆れて彼を非難する。それにたいしてエンディミオンは次のように幸福についての考えを述べる。

Wherein lies happiness? In that which becks



不滅性への探求

Our ready minds to fellowship divine,  
A fellowship with essence, till we shine  
Full alchemized, and free of space. Behold  
The clear religion on heaven !

(1. 777-781)

ここでエンディミオンはキーツの幸福の奥儀を我々に述べているのであるが、このなかの「聖なる交わり」または「精髓との交わり」はエンディミオンのパン神信奉の内容を考えれば、まず自然界との交わり、人間が自然の一部となってより大きな自分を生きることを指しているのに間違いない。それが「月」である「天の明澄な宗教」の教えでもあるという。更に具体的な例がここにある。

Just so may love, although 'tis understood  
The mere commingling of passionate breath,  
Produce more than our searching witnesseth—  
What I know not, but who, of men, can tell  
That flowers would bloom, or that green fruit would swell  
To melting pulp, that fish would have bright mail,  
The earth its dower of river, wood, and vale,  
The meadows runnels, runnels pebble-stones,  
The seed its harvest, or the lute its tones,  
Tones ravishment, or ravishment its sweet,  
If human souls did never kiss and greet?

(1. 832-842)

愛というものがただ情熱の息吹を交わしあうだけに見えても、実は我々の探索の目の及ばないものを生み出すということの例えに、花が開くこと、果実が膨らむこと、魚に新しいうろこができることを挙げているので、ここでいう「愛」は生殖にかかわる地上の愛であることがはっきりする。しかし愛の行為の結果として生まれる新生はすべての存在にとって天上的な神秘なのである。なぜなら、それなくして自然界は枯れて朽ち果ててしまうからである。生殖を促すものとして「愛」は、新生の「美」を生み出し、「美」はまた新たな「愛」を引きつける。

この「愛」と「美」の連鎖によって繰り返される自然界の恒常性を神的不滅性ととらえ、人間のそれとの交わりを「聖なる交わり」としているのである。その交わりとはどのようなものかは、次の記述から推察できるのである。すなわち「人間の魂が互いに接吻して、挨拶をしないなら、誰がこれ(大地の愛と美)を語ろうか」という記述の意味は、大自然の新生の歓びとその美は、人間もまた互いに愛し合う存在だからこそ理解され、めでられ、その美は詩歌や様々な芸術によって再生されて不滅性を与えられるということであろう。これは勿論「自然」が望んでいることではなく、反対に「自然」から受ける強い感動が人間の精神に「自然」と同じようにものを生み、育む情熱を増幅させてくれることを人間の立場から語ったものである。キーツは人間の創造的能力を人間の存在そのものと同様に自然のものと考え、更に、芸術というものを一種の精神的生殖と考えている<sup>4)</sup>。その底に走る官能的情動は「自然」のものと同じ根をもつと恐らく考えているのである。この根元的な生命の営みに触れることが「精髓との交わり」と書かれていたもので、エンディミオンの月の女神との「愛」で象徴される幸福の状態の事である。すると、これは詩人として芸術的なインスピレーションとの出会いを意味していることにもなり、『エンディミオン』の主題はやはり「美」という議論になるが、しかしキーツにとって、詩的インスピレーションも「愛」の一部なのである。そこでキーツの地上の愛とは、キリスト教で一般に天上の愛と対比されているものと違って、むしろ自然のなかに天上的な要素を見る「大地の愛」で、崇高な輝きをもつものなのである。キーツのその考えを更に具体的に示すため、エンディミオンに彼の経験の浅いことを嘆かせ、大地の愛の奥儀に触れさせるために女神の力で彼を地下の世界に迷い込ませている。月の女神はしばしば地母神イシスと結び付けられ、またエリアーデによれば<sup>5)</sup>、月相の変化が雨をもたらすと云われてきたことから、植物に命の水を与える豊穡神としての一面もあるという。しかしそのように神話的解釈の助けを借りなくとも、以上のことから「大地の愛」は「月」の不滅の輝きを帯びているものとなるので、彼の地下の旅は「月」の探求となるのである。

エンディミオンが永くさすらった後、地下の世界で目にしたのは地上に豊穡をもたらす植物神アドーニスとヴィーナスの愛の光景だった。アドーニスはヴィーナスに愛された美しい少年だったが、狩りの途中、野猪に襲われ、ヴィーナスの必死の介抱の甲斐もなく、死んでしまう。嘆き悲しむヴィーナスはゼウスに頼み、冥土の女王ペルセポネに懇願して、春から夏にかけて、一年の三分の一だけアドーニスを地上に返してもらおう。アドーニスが地上に帰ってくる季節に大地には芽が吹き、生命が蘇るのである。エンディミオンがアドーニスの冬の眠りの庭にさしかかったとき、折しも、彼が地上に戻る時季にあたり、キューピッドは彼を揺すり、天からは待ちくたびれたヴィーナスが白いハットにひかれた車で駆け降てくるところであった。「もっと

も恥なき詩神すら、彼らのような熱い抱擁には恥じらって言い訳する」<sup>6)</sup>と書かれるほどの抱擁のシーンののち、蘇り、地上に帰っていくアドーニスの姿は自然が天上の息吹に結ばれて新生となる必然の連鎖の象徴である。これを目の当たりにしたエンディミオンは大自然のサイクルを司どるエロースの地下のエネルギーに直に接したことになる。ここに、愛を原動力とした性的行為の根源にはアドーニスとヴィーナスの愛のシーンに見られるような強烈な美の輝きがあるというキーツの主張が見られる。これは、女神への思いを募らせて眠りについたエンディミオンが夢のなかで再び黄金の髪の恋人を見出し、愛と不可分の性、「大地の愛」を経験することへの序曲の役割を果たしている。

Now I have tasted her sweet soul to the core  
All other depths are shallow. Essences,  
Once spiritual, are like muddy lees,  
Meant but to fertilize my earthly root  
And make my branches lift a golden fruit  
Into the bloom of heaven.

(Ⅱ. 904-909)

夢のなかで「女神の愛」を体験したエンディミオンはこの経験で「自分の地上の根を肥沃にし、これによって自分の枝に天上の花となる黄金の果実を实らせよう」というが、これは、この「大地の愛」の経験が芸術的な美を生むというキーツの先の主張が実現されたもので、ここにこの作品のひとつのピークが見られるのである。

キーツは生一般を把握するのには論理的な方法より、感覚的、官能的把握の方がより優れているという考えをもっていることが書簡などからも知られている。エンディミオンの愛の経験もそのひとつである。しかしキーツは感覚に頼る生き方の危険に無頓着だったのではない。危険を知ったうえで、美的に実感することが本質に迫る一番優れた方法として感覚を愛したのである。そのことは『エンディミオン』の展開のなかで明らかにされている。エンディミオンの遍歴は更に続くことになる。パン神の知識を自分のものにし、月の女神に一步近づいたが、彼にはまだすべきことがあった。感覚や官能を中心とした、世界への認識は具体的、総合的に物事をとらえる優れた働きを持つが、反面、理性や観念の介入を拒むので、感覚や官能に溺れたとき方向を見失うという危険がある。彼の次の務めはその危険の回避である。地界に走るアルフェウスとアレシューサの悲恋を示す決して交わることのない二本の川筋が、同じように恋人

と巡り合うことの出来ないエンディミオンの苦悩を誘いながら、海に流れ込むのは、彼を次の舞台、海底へと導く物語上の伏線となっている。

### 3. 「月」と「悲哀」

第三巻では、まず初めに海に掛かる悲しげな月の様子が歌われている。「月」は海底を照らしている。勿論月光に深海まで貫通する力はない。しかし月は潮の満ち干に影響を及ぼす。日の光もとどかない海底もそこに住む生物はその生態に潮の満ち干の影響を受けながら暮らしている。すべての命が愛の息吹によって新しく生まれ変わることがこれまで詩のなかで歌われてきたので、命を育む潮の満ち干を司る月は深海までその愛の力を及ぼしていると考えられるのである。

Thou art a relief

To the poor patient oyster, where it sleeps  
Within its pearly house. The mighty deeps,  
The monstrous sea is thine—the myriad sea !  
O Moon ! Far-spooning Ocean bows to thee,  
And Tellus feels his forehead's cumbrous load.

(Ⅲ. 66-71)

蚌は満潮になると殻を開くことが知られている<sup>7)</sup>。キーツはそれを知っていて具体的な例として挙げたのだろう。大地が潮によってその額に重荷を感ずるとは、満潮時の海岸の様子のことであるが、そこに「重荷」という言葉を使っているのは、海がこの詩のなかで人間の苦悩や悲しみを表わすイメージとして使われているからであろう。次に引用する海を見つめる月の描写でそのことはますますはっきりするだろう。

Alas, thou dost pine

For one as sorrowful. Thy cheek is pale  
For one whose cheek is pale. Thou dost bewail  
His tears, who weeps for thee. Where dost thou sigh ?  
Ah, surely that light peeps from Vesper's eye,

Or what a thing is love ! 'Tis she, but lo !  
How changed, how full of ache, how gone in woe !  
She dies at the thinnest cloud, her loveliness  
Is wan on Neptune's blue. Yet there's a stress  
Of love-spangles, just off yon cape of trees,  
Dancing upon the waves, as if to please  
The curly foam with amorous influence.

(Ⅲ. 74-85)

夜の暗い海に掛かる月は、その冷たい闇を反映するように、蒼ざめている。その美しさも深い海を前にしては色をなくしている。海の底には悩みにあえぐエンディミオンがいるのである。海とはエンディミオンの苦悩の表現であり、それは人間の死すべき運命による苦悩の淀みを指していると考えることができる。また世界を憂いて月が青白くなるのは、我々に対する月の愛の深さを示している。世界は苦悩に満ちていても、それを憂うる心があり、その心がこの世の空しい苦役を悲劇へと高めるのである。海に対する月の影響力はそれゆえ人間の精神を高める愛の働きを意味している。月が海の暗さを反映して蒼ざめたり、輝いたりし、波もまた月の光に歓び躍っているという描写はこの詩の主題である「天と地の融合」の最高のイメージである。

エンディミオンは海底でグローカス<sup>8)</sup>と出会う。グローカスはエンディミオンに「君がこの運命づけられた場所に遣わされたのは偉大な解放のためだ。」<sup>9)</sup>という。そして彼は自分がここに閉じ込められている訳を話すとともに、あるとき恋人たちをのせた船の難破を見たこと、そして海に沈んでいった人たちの一人によって一つの巻物が手渡され、それには千年ののちエンディミオンがやって来ることが書かれていたと話す。そしてエンディミオンがそこに書かれている務めを果たさなければ、自分たちは二人とも滅ぶ運命となると教えた。するとエンディミオンは「それなら、この運命で我々は双子の兄弟なのだ！……もし貴方から私の漂泊の歩みがそれでしたら、私たちは二人とも滅びたのか？」<sup>10)</sup>と叫び、二人の出会いをよろこぶ。

グローカスは海辺で孤独に海の生き物と調和して生きる若い漁夫で、エンディミオンが天に憧れたように、彼はネプチューンの海に憧れていた。エンディミオンは遂に夢のなかで天からの訪問を受けその永遠性に触れたが、グローカスも海への憧れが募り、遂には自分から海に飛び込み、魚のように自由に泳ぎ回る特権を得た。やがて彼はニンフのシーラに恋をして言い寄るが臆病なシーラは逃げ回る。悩みの末にかれは魔法に優れたサーシに相談に行くが、彼女は彼を一目見て夢中になってしまい、グローカスを誘惑して自分の虜にしてしまう。

Who could resist? Who in this universe?  
She did so breathe ambrosia, so immerse  
My fine existence in a golden clime.  
She took me like a child of suckling time,  
And cradled me in roses. Thus condemned,  
The current of my former life was stemmed,  
And to this arbitrary queen of sense  
I bowed a tranced vassal.

(Ⅲ. 453-460)

この「黄金の雰囲気」は、エンディミオンと月の女神の愛の雰囲気と重なるイメージである。しかしエンディミオンの場合とちがって、サーシはグローカスを支配する。やがてグローカスはサーシの不気味な魔性を知り、逃れようとするが無駄で、彼は裏切りものとして海底に千年いざりながら暮らすという宣告を受ける。海辺には愛するシーラがサーシに殺されて横たわっていた。海の底とはサーシの色香にだまされ、真実の愛を裏切って取り返しのつかない誤りを犯したグローカス自身の後悔と苦悩の深さを示すものである。エンディミオンの苦悩とグローカスの苦悩は同じ海の底で会う。グローカスは感覚を重視する生き方の最も危険な姿を表わし、エンディミオンの同じ生き方の欠点を示すものとなっている。二人が出会わなければ二人とも破滅するということは、グローカスはエンディミオンの分身で、エンディミオンはグローカスの経験を受け入れることによって感覚による生き方の危険を回避し、その生き方を完成させることが出来るということである。

海底におけるエンディミオンの「使命」は、巻物に書いてあった方法で、シーラを始め、難破で海の底に沈んだ恋人たちをよみがえらせ、彼らの愛を成就させることであつた。それは地下の世界で「大地の愛」を経験したエンディミオンにのみ果すことの出来る使命であつた。愛と性の分離した状態にあつたグローカスはエンディミオンに出会うことによってここで真実の愛を回復したことになる。不毛の愛は恋人たちにとっての死であり、船の難破でたとえられているものは愛の挫折であつた。二人は、命も愛もよみがえった恋人たちを海底のネプチューンの宮殿に導く。その宮殿のさん然と輝く美しさは、荒涼とした苦悩の海も不滅の神ネプチューンの支配する愛の秩序による生きた相をもつものであつたことを示している。

ネプチューンの宮殿の愛のよろこびの光の渦のなかにあつても、まだ自分ひとり恋人を見出

せないエンディミオンは遂に海底で気を失い、再び地上につれ戻された。ここで彼は海底の苦悩を更に深めて、人間存在の悲哀を経験することになる。

次にエンディミオンは暗い森の茂みで悲しげに歌うインドの乙女の声聞き、心を強く引かれるようになる。彼女は「おお！悲しみよ」で始まる一連の歌のなかで彼女の不幸な境涯と現在の悲しい気持を彼に話す。花婿に捨てられた乙女の嘆きは、エンディミオン自身の嘆きを語っており、また気晴らしを求めてバッカスの行列の乱痴き騒ぎに加わり、いずことも知らないところへきてしまったという彼女の話は、同じようにあてもない漂泊の途上にあるエンディミオンの同情を引く。彼女はいま、悲しみや苦しみからは所詮逃れられるものではないことに気づき、現実を目覚めて泣いているのであった。

O Sorrow,  
Why dost borrow  
The natural hue of health, from vermeil lips?  
To give maiden blushes  
To the white rose bushes?  
Or is it thy dewy hand the daisy tips?

(IV. 146-151)

この第一連を読むと、キーツは、この世の美と歎びの量は変わることなく、ただそれが一方から他方へ移るだけだと考えていることがわかる。そして美が一方から他方へと移るのは「悲しみ」がその間に介在するからであるという。これは原因と結果の撞着融合である。つづく第二連から第四連までも「悲しみ」がその美を奪うさまざまなものについて歌っている。この世が時間の移ろいの中に存在するかぎり、すべてのものは盛衰の定めがあり、それを執り行うのが「悲しみ」であるということになると、「悲しみ」はこの世の属性であることになる。キーツの意図は「悲しみ」の、この積極的なとらえ方にあるのであろう。彼はこの世に生きるには宿命としての *mortality* を受容しなければならないと考えているのである。

Come then, Sorrow!  
Sweetest Sorrow!  
Like an own babe I nurse thee on my breast.  
I thought to leave thee

And deceive thee,  
But now of all the world I love thee best.

(IV. 279-284)

これを読むとキーツにとって「悲しみ」は受容すべきものであるばかりか最も愛すべきものでもある。これは勿論美的レベルで見ているのであるが、最も輝かしい季節から「美」を奪い、冬枯れを残す一方で春にその「美」を与える「悲しみ」は、「美」のなくてはならない伝達者なのである。キーツにとって「美」と「悲しみ」はほとんど一つのものの裏と表である。これは「愛と美」に更に「悲しみ」を加えたキーツの生の基本図である。愛が美を生み出す地下の待機のとき、地上は冬枯れてわびしさに委ねられている。冬枯れの期間は「悲しみ」が「美」をこれから来る春に手渡す仕事をしているときであるということなのである。

更にこの考えを人間に当てはめようとするとき次のソネット<sup>11)</sup>を見るとわかりやすい。

Four seasons fill the measure of the year;  
There are four seasons in the mind of man.  
He has his lusty spring, when fancy clear  
Takes in all beauty with an easy span.  
He has his summer, when luxuriously  
Spring's honeyed cud of youthful thought he loves  
To ruminare, and by such dreaming night  
His nearest unto heaven. Quiet covers  
His soul has in its autumn, when his wings  
He furleth close, contented so to look  
On mists in idleness—to let fair things  
Pass by unheeded as a threshold brook;  
He has his winter, too, of pale misfeature,  
Or else he would forego his mortal nature.

ここには *mortality* の誇りが歌われている。キーツは *mortality* について独特の考えをもっていた。彼はこの世を「魂の形成の谷」と呼び、この世の苦悩によって鍛えられて変化する性質の部分の魂と考え、この魂の存在によって人間性の不滅をおぼろげだが感知しているといつて



いる<sup>12)</sup>。つまり *mortality* は魂を育てる条件となるのである。*mortality* のバネがあってこそ *immortality* がはじけ出すのである。エンディミオンのインドの乙女への思慕は、こうしたキーツの魂の不滅性を成就するためのステップである。

物語では、エンディミオンがインドの乙女と暮すのを自分の境涯と心得て、夢の恋人を諦めるつもりになったとき、天からマーキュリーが舞い降りて、「エンディミオンに災いあれ」<sup>13)</sup> といって大地を叩き、芝生の中から黒玉のように輝く天馬を出現させ、二人を天空へと運ぶ展開となる。これはエンディミオンがインドの乙女と月姫が同一であることを知らずに、月姫を思い切り、インドの乙女だけを愛そうとしたからである。彼にはインドの乙女の象徴する「悲哀」と「月」の不滅の輝きを結ぶ役割がまだ残っていた。

一方、天上では、次々とパン神の神秘を自分のものにし、不滅の女神に相応しいものになりつつあるエンディミオンのため、女神との結婚の準備が着々と進んでいたが、それとも知らず、宴の準備の場に行き合わせたエンディミオンは夢の恋人が月の女神だったことを知り、連れのインドの乙女と女神との間で心が押し潰される思いをする。悲しそうに去っていく月姫を追いかけようとするやインドの乙女が忽然と消え、彼は二人を同時に失うという衝撃のなかで、突然「静寂の洞窟」<sup>14)</sup> に吸い込まれたのである。ここは人間がその苦悩の果てに行き着く心の深い領域である。

Enter none

Who strive therefore—on the sudden it is won.

Just when the sufferer begins to burn,

Then it is free to him, and from an urn,

Still fed by melting ice, he takes a draught—

．．．

For never since thy griefs and woes began

Hast thou felt so content. A grievous feud

Hath led thee to this Cave of Quietude.

(IV. 531-535...546-548)

キーツはこの境地を例によって「楽しい憂鬱」“Happy gloom!” や「暗い天国」“Dark paradise!” という oxymoron を使って感覚のレベルで捕える。“gloom” と “Dark” は *mortality* の意識であり、“Happy” と “paradise” は *immortality* につらなるイメージである。こ

の oxymoron でキーツは *mortality* と *immortality* の融合した心理状態を示し、ここで「悲哀」は「月」と結ばれ普遍性を得たことになるのである。月の女神に導かれるままに運命の杯を飲み干したエンディミオンについて悟りに似た心境が開かれた。これがキーツのいう「魂の形成」が成就され、より高次の人間性に到達したことを意味するものである。「静寂の洞窟」の恍惚の心境にあるエンディミオンの頭上で、月姫の婚礼の祝宴が今始まろうとしているのは、彼がもう天上のものであることの証明である。物語の中でエンディミオンが天上に昇るのは、それとは知らず、地上に戻って、自分なりに気持ちの決着をつけようとしたとき、彼の目の前で突如インドの乙女が月姫の輝く姿に変容し、彼が真の幸福に近づいたその時である。

### 結 び

以上、エンディミオンは月の女神と結ばれた。ギリシャ神話では二人は結ばれず、天と地の融合は不成立のまま、エンディミオンの「眠り」の中に宙づりになっていたが、キーツはこの「眠り」から出発して「眠り」の中の覚醒である「夢」を使い、その夢を正夢へと運び、みごと目的を果たした。物語のこの構成上の成功には、「眠り」と「夢」の演出があったことは見のがせない。最後にその点に触れて結びにかえたいと思う。

キーツは天地融合の文脈を作り出すために、先ずエンディミオン神話の「眠り」を利用している。キーツは夢の場を借りてエンディミオンに女神との愛の契りを結ばせた。エンディミオンはそこで通常では経験できない永遠の美すなわち「実在の美」を知ったことになる。しかしこれは所詮、眠りの世界での話である。そこでキーツは、目覚めてひとりだと知ったときのエンディミオンの激しい渴きの描出や、女神を求めて地界、海底、天界の三界をさ迷う姿、またその巡歴の中で人間性を深めていくストーリーによって、彼にとってその夢がただの夢に終わっていないことを我々読者に理解させ、夢の体験を実際の体験に近づけるのである。それは詩人の創作力に懸かるもので、それによって読者は新しい神話を受け入れ始めるのである。これは、フライが指摘しているように、夢の願望達成の性質と詩人が作品を通して示す詩人の熱望が似ている<sup>15)</sup>ところから可能になる魔術であろう。これに関連するようなことをキーツはやはり書簡の中で云っている。「人の心の情愛と想像力の真実を除いては、ぼくには何も確かだとは思えない……—というのは僕は情熱とは愛と同じで、それは崇高なものとなる時本質的な美を生み出すと考えている。……—想像力が美として捉えたものこそ真実であるに違いない。想像力はアダムの夢に例えられるだろう。—彼はめざめてみると夢が真実であることを知ったのだ。」<sup>16)</sup>「アダムの夢」とは、ミルトンの「失樂園」<sup>17)</sup>の中で描かれているもので、夢のなか

で創造者の手によるイヴの誕生のヴィジョンをみたアダムは、その美しさに強烈な喜びを覚えたが、はたして目を覚ましてみると幻滅するどころか本当にイヴを見出したというものである。

エンディミオンの場合は夢から覚めるとひとりであることを知り、やつれ青ざめる。それが現実だからである。しかしキーツは前述のように「アダムの夢」にかかわって想像力で夢を実現する方法を発明していた。主人公に感情移入をし始めている読者も夢の実現を期待している。キーツにとって「アダムの夢」は、想像力が美として捉えるものは真実であるというところから出発しているので、想像力の結実である詩が真実の美を描くことが出来れば、キーツはエンディミオンの夢を、つまり自分の夢を「アダムの夢」にすることができるのである。このことは詩があらゆる美しいものを筆をきわめて綴ることによって果たされるものではなく、詩が描いたものが読者に「美の体験」である心に刻み込まれる深い感動を与えたかどうかにかかってくる。独自の世界創造をするようになったロマン主義の詩は創造された世界を現実のものにするために、読者の認定が必要なのである。読者または観客の感性が作品の完成に不可欠の要素となるのは、こうした内容からロマン主義の芸術一般の特徴でもある。エンディミオンの目を通して示される「美」が読者にとっての「美」となったとき、作品の主張する世界が真実であると認定されたことになる。そのため作者はまず我々読者を作品の中に参入させる必要があり、その効果を高めるのに使ったのが妹ピオナの登場であった。ピオナは我々読者の代表としてエンディミオンと女神が大空に消え去るのを見届けたのである。物語は大変首尾よく出来上っているが、しかしそれが読者の感性を作者の想像力の高みにまで導びけたかどうかの判断は、もう作者の手のとどこかないところにあるのは言うまでもない。

この作品の世界は、信じたときに理解できる信仰の世界に似ている。それは読者が「美」を感じ取れたときのみ存在しうる霊妙なものなので、その反面として、作品が鬼火で終わってしまう不安はいつもつきまとう。そのことをキーツはやはり書簡のなかでいっている。「僕は時々非常に懐疑的になることがあって、詩そのものさえただの鬼火にすぎなくて、その輝きにたまたま心打たれた人を楽しませるだけなのではないかと思うときがある……おそらくすべての精神的な追求は—追求そのものは無だが—追求者の熱意からその実体と価値を獲得する—かくして霊妙な物事は実体的になるが……」<sup>18)</sup>キーツのこのような不安とそれを打ち消す気概を反映し、『エンディミオン』はキーツの熱い追求そのものであり、またその結果である。四千行の詩とその魅惑的なイメージの房また房は。

この小論では詩のイメージやシンボルを主題と結び付けることに主眼をおいたので個々のイメージやシンボルについての細かい鑑賞や解釈に入ることが出来なかった。おそらくイメージやシンボルだけを扱ってもいくつもの論文が可能であろう。人間の愛と悲しみ、謂ば生のエロ

スとタナトスを扱っても、そのタナトスの表現に悲恋や失恋の官能的イメージを使うところにキーツの特徴がある。そのため悲劇についての描写に重みがなくなるが、キーツは世の悲惨を知らなかった訳ではない。キーツの伝記を見れば、彼を取り巻く環境は幼いときから悲しみ、苦しみに満ちていた。むしろ知っていたからこそ、存在の暗さ、不安定さを払拭するために、他者への融合、合一の実感を欲し、かくも熱心に感覚的、陶酔的「美」を欲したのではないかと思う。実際キーツの美への陶酔の裏側にあるものは憂うつの世界である。キーツにとって世界は憂うつさと光輝が表裏一体にある妖しい美を放つものに見えた。その美意識は後に、世紀末のラファエル前派の詩人たちにもてはやされるようになるものだが、それがキーツの詩の本領である。それは闇と月光で象徴される世界であり、『エンディミオン』の世界そのものである。その「きらめく憂うつ」<sup>19)</sup>の「美」は我々読者の心を打たないであろうか。

## 注

1. M. Allott, ed. *The Poems of John Keats* (London: Longman 1970) 作品の引用はこの版による。
2. H.E. Rotins, ed. *The letters of John Keats: 1814-1821*, 2vols. (Cambridge, Mass: Harverd U.P., 1958), I, pp.169-70, 以下 *Letters* と略する。Keats の書簡からの引用はすべてこれによる。
3. *Letters*, I, p.170
4. *Endymion*, I, 783-794
5. エリアーデ著作集 2 巻 久米博訳『豊穡と再生』（せりか書房）pp.7-11
6. *Endymion*, II, 532-533
7. A.L. リーバー、藤原正彦・美子訳『月の魔力』（東京書籍）p.80
8. ギリシャ神話 ギリシャ神話では、グローカスがスキュラ（シーラ）の事をキルケ（サーシ）に相談するとキルケ自身がグローカスに夢中になるが、彼の思いはスキュラのことばかりであった。怒ったキルケはスキュラを怪物に変えてしまう。この怪物は腰から下に犬の6つの頭と12本の足もつ姿で、カリュブデイスの渦潮に面する洞穴に住み、『オデュッセイア』にも登場する。
9. *Endymion*, III, 298-299
10. *Ibid.*, III 716-717
11. このソネットは1818年5月7日から13日の間に書かれ、キーツからベイリーへの手紙の中にコピーされた。
12. *Letters*, II, p.58
13. *Endymion*, IV,
14. *Ibid.*, IV, 513
15. N. Frye, *A Study of English Romanticism* (1968: rpt. The Harverd Press, 1983), p.187
16. *Letters*, I, p.185
17. John Milton, *Paradise Lost*, VIII, 452-89
18. *Letters*, I, p.242
19. *Endymion*, II, 223: "a gleaming melancholy"

参考文献

- M. Aske, *Keats and Hellenism* (Cambridge U.P. 1985)  
W.J. Bate, *John Keats* (Harvard U.P., 1963)  
W.H. Evert, *Aesthetic and Myth in the Poetry of Keats* (Princeton U.P., 1965)  
N.F. Ford, *The Prefigurative Imagination of John Keats* (Stanford U.P., 1951)  
J. Jones, *John Keats's: Dream of Truth* (London; Chatto & Windus, 1969)  
出口保夫 『キーツ全集別巻一人と作品』(白風社, 1974)  
小川和夫 『キーツのオード—鑑賞と分析—』(大修館書店, 1980)  
K. ケレーニイ, 円子修平訳 『ギリシャの光と神々』(法政大学出版局, 1987)  
阪田勝三 『ジョンキーツ論考—自己解体としての想像力』(南雲堂, 1976)  
高橋雄四郎 『ジョンキーツ—想像力の光と闇』(南雲堂, 1989)  
滝内静雄 『メタファーの現象学』(世界書院, 1988)  
藤田真治 『キーツのオードの世界』(南雲堂, 1989)  
G. パシュラール, 小浜俊郎, 桜木泰行訳 『水と夢』(国文社, 1969)  
水之江有一 『キーツとロマン派の伝統—美の形象文学とその幻想性—』(北星堂, 1979)  
山内正一 『キーツ研究』(大阪教育図書, 1986)